

応戦と抑留の記

愛知県 鈴木 英一

開戦前

チチハルの満州電々に勤めていた私は、昭和十九（一九四四）年十月に一年繰上げの徴兵で、ハルピン香坊の関東軍第一兵技教育隊（満州第二六三部隊）に現地入隊。一期の検閲が終わると転科して、昭和二十年一月にハルピンの歩兵第一七八連隊（満州第二〇九部隊）に転属した。

この部隊は十九年六月にハルピンで編成した新設歩兵部隊だった。十九年十一月に秋田の歩兵第一一七連隊補充隊から二度に分けて七百四人の現役兵が入隊、十二月に朝鮮系兵三百四人が入隊したが、秋田からの現役兵の多くは新設部隊に転出して行った。二十年三月に部隊はハルピンからチチハルに移駐。四月に第二大隊と連隊砲中隊が遼陽第四一五部隊に派遣されて行った。ハルピンで

は対ソの演習をしていたが、チチハルでは夜間奇襲や戦車への肉薄攻撃訓練をするようになった。

二十年七月に師団司令部の在る白阿線の五又溝に移駐して第一〇七師団の指揮下に入った。

当初、阿爾山正面の防衛は永久陣地でソ連軍の進攻を阻止する計画だったが、関東軍の作戦方針の変更で阿爾山は前線基地となり、本陣地は五又溝周辺に後退して七月から陣地構築の作業をしていた。

ソ連軍との戦闘

八月九日、突如、ソ連軍の侵攻を受け応戦。この日、在満の学徒や半島出身者が入隊してきた。

部隊の主力は北正面の吉田山陣地で交戦していたが、新京方面に転出せよとの師団命令で部隊は五又溝を出発。十四日、西口で有力なソ連軍と遭遇した。第一、第三大隊は展開し攻撃して戦闘を続けたが、砲兵の協力が期待できず、速射砲も手元になく、重機、大隊砲も手持ち弾薬が充分でな

かった。このためソ連軍の迫撃砲などで苦戦して、戦死者三十九人、負傷者十七人を出した。

私の分隊も、学徒兵一人が戦死。入隊して五日目に速成の兵士として戦場に臨み、若い命を散らしてしまった。

部隊長は撤退を命じ、夜陰に乗じて離脱したが、昼を欺く照明弾の下を山の峰づたいの強行軍だった。以後、夜間に移動し昼間は興安嶺の山中で休憩に努めた。やがて敵襲の恐れもなく昼間の行軍に切りかえたが、携帯口糧もすでになくなっていった。

山地も平坦な丘陵地となって満州人の農家も見かけるようになり、唐もろこしをもぎ取って生のままかじり飢えをしのいだ。

八月二十四日に興安南省扎来特旗音德爾に到着して設営、食糧の確保などして休養、三週間ぶりのことだった。

軍使が飛来。停戦を知る

二十五日には敵の砲声を聞くようになり、周辺に壕を掘って警戒態勢を執った。

二十九日の午前十時頃、両翼に日の丸、尾翼に吹き流しをつけた飛行機が一機、低空を飛んで来て旋回しビラを撒いた。何だろうと私は拾って読む。

「停戦協定成る。天皇陛下の大御心によりソ連軍と停戦協定が成った。関東軍将兵は最寄りのソ連軍に武器を渡すべし。なお、本協定により俘虜と認められず。関東軍総司令官陸軍大将山田乙三」

（このような文句だった。このビラはソ連の收容所での私物検査で没収された）

誰もこの停戦のビラを信じなかった。「謀略だ！ 拾うな！」と古参の下士官が怒鳴り、飛行機に銃口を向ける兵隊もおった。

上空を旋回していた飛行機が突然草原に強行着陸して、機内から参謀肩章を着けた関東軍の将校

二人とソ連軍将校一人が降りてきて、「軍使だ！将校はおらんか！」と大声で言った。部隊の将校の案内で師団司令部に行く。

一時間程して、旗公署の屋上に翻っていた日章旗が下ろされて白旗が上った。

間もなく武装解除。私達は武器の山を見て、まだ戦えるのではないかと無念の思いにかられた。

後日、聞いたところによると、ソ連軍司令部から関東軍総司令部に対して、「まだ停戦をせず戦闘を続けている日本軍がある」と嚴重な抗議があり、関東軍総司令部では飛行機で西満方面の搜索を始めて、二日目に私達の師団を発見してピラを撒いたが、ソ連軍の第一線が至近距離に迫っており、一触即発の状況だったので一刻も猶余ができないと決死の覚悟で草原に強行着陸したとのことだった。

もう数時間、軍使の停戦伝達が遅かったならば、私達は優勢なソ連軍と激戦を展開して大損害を受けていたかもしれない。

屈辱の行進

八月三十日に音徳爾より興安に向けて行進。九月三日に興安に到着して、負傷者、病人をソ連興安病院に収容。六日に出発、翌七日に徳伯斯に着いた。

この間、ソ連軍兵士の監視のもとに行進。ソ連軍駐屯地を通ると、時折、万年筆など身に着けた物を略奪され放題、将校は長靴、皮鞆などを剥ぎ取られた。私達は、三週間にわたる戦闘と一週間余の行進、その上、食糧もなく疲労困憊していた。

武器を持たない集団はもはや軍隊ではなく、かつての栄光の関東軍の面影は見られず、その姿は屈辱の行進だった。

ある時、ソ連軍のトラック（米国製）が数台通った。どこへ連れていかれるのか、荷台に日本の女性や子供が大勢乗っており、子供が手を振りながら大声で「兵隊さん！」と叫んで行った。

民間人を守る軍隊が、成すすべもなく敗戦の姿をさらしたことは慚愧に堪えない思ひだった。

徳伯斯で野砲兵第一〇七連隊（満州第二三六部隊）の空兵舎に入った。兵舎は乱雑な状態で、ソ連軍の侵攻が急であったことを物語っていた。

輸送列車の都合か、ここでしばらく足留めをくらった。自給自足の食糧は底をついていた。

兵舎から百メートル程離れた所に我が軍の糧秣倉庫があったので、ソ連軍兵士の警戒の目をくぐって決死の思いで食糧の確保に行った。

九月三十日、狭い貨車に詰め込まれて、やっと徳伯斯を出発して十月三日にチチハル郊外の小民屯の収容所に入れられた。

開戦以来着の身着のまま、汗と垢にまみれ、体も服装も薄汚く真つ黒だったので、先着の他部隊からはカラス部隊と言われていた。ソ連軍と戦闘した部隊ということで、収容所の柵の中のもう一つの柵の中に収容されてしまった。

ある日のこと、半島出身の兵隊がいつの間にか太極旗を掲げて収容所を出て行った。私達は呆然とそれを見送っていた。

十月三十日、部隊長堀尾茂光大佐が全員を集めて訓示があった。「今から内地に向かって前進する」と。

私達は作業第十八大隊として千五百人が編成されて、大隊長 荒井初雄少佐が指揮して収容所を出発、家畜のように狭い貨車に押し込められて、十一月三日に満州里を通過した。

ソ連領に入ると、通過する駅ごとに物質の山を目にする。満州から運んだものである。

輸送貨車の中で一番困ったのは大便。殆どの兵隊は下痢をしていたので、停車するたびに線路に飛び下りて用を足すので、駅から離れて停車するようになった。

貨車は西に進み、ある地点で東向きを変えてウラジオストクから日本海を渡って帰国するものと全員が確信していたのだが、ある時、貨車の進行方向に夕日が沈んでいくのを見て、「シベリア行きだ！ だまされた！」と異口同音に叫んだ。

ハラグン収容所

十一月六日にザバイカル鉄道の小駅ハラグンに着き、ダワイ、ダワイと下ろされて駅前で露營した。シベリアの十一月は非常に寒い。震えながら焚火をして一夜を明かし、翌日、十五キロ程歩かれ、山の中に整地がしてあり、長い丸太で柵がしてあるところに到着した。早速作業が始まる。

ドイツの捕虜を収容する兵舎を造り、完成したらダモイだとまことしやかな話につられて頑張った。凍った地面を焚火で溶かして円匙や十字鍬で掘るのだが凍った土はなかなか受けつけない。数日かけてなんとか深さ一メートル五十センチぐらい掘り、伐採した丸太で屋根を造り、半地下造りの兵舎が完成したが、何のことはない、私達が入れられてしまった。これが五一六大隊となった。

内部は狭い二段の蚕棚。焚火をして暖を採り、飯分配をするときは白樺の幹の皮を燃すので真っ黒の煤けた顔になった。

初めて鋸と斧を手にして伐採作業をする兵隊は

かりで、二人一組のノルマは四リユーベだった。

毎朝、暗いうちに門の前でソ連兵の人員点呼がある。五列縦隊に並ばされて一人一人数えていくので長い時間がかかる。冬の間は厳寒の中で足踏みしながら寒さに耐えて出発を待つ、毎日のことだった。

朝夕の食事は雑穀の粥食が飯盆の蓋に八分程、魚や野菜が少し入ったスープなど。昼食は黒パン三〇〇グラムだが、前日の夕食の時に分配されるので夕食と一緒に食べて腹の足しにした。昼は伐採の現場で飯盒いっぱい雪を入れて溶かし、その中にアカザ、タンポポ、ノビルなど食べられる野草やきのこを入れ、岩塩を少し放り込んで焚火で煮て食べた。栄養は二の次、とにかく、腹がふくれればよかった。

空き腹を抱えての伐採で体力も消耗して体がだるく、顔がむくみ、その上、下痢が続き、極度の栄養失調になってしまふ。

ソ連の女兵士にちよつと肩を押されただけで雪

の上に転がる情けない状態。更に虱がわいて回帰熱の症状を起して倒れるようになる。

階級制度も依然として残っており、若い新兵や年配の応召兵など年次の浅い兵隊は雑用に使われ、休養もままならない状態だった。

食事をしていた箸をポトリと落としてそのまま息が絶える。朝、隣の兵隊が起きないのでよく見ると死んでいる。珍らしいことではなく、次は自分の番かと観念したものだ。軍隊組織を解体しようとするソ連側の方針で、原隊の戦友と離ればなれになるので隣の兵隊の身許が分からなくなっている状況だった。

五一六大隊と川を隔てて五一五大隊があった。この大隊は二十年九月八日に新京編成作業第十八大隊の千五百人で、大隊長は上古正樹大尉だった。主力は北支派遣軍から二十年七月〜八月に満州に移駐して関東軍の麾下に入った部隊で、二十年九月二十八日にハラグンに到着したとのこと。私達より大分先に入ソして伐採作業をしており、栄養

失調、回帰熱で犠牲者がかなり出ていたようだった。

二十一年十二月に五一五大隊と五一六大隊で人員の移動があり、私も他の仲間と五一五大隊に移った。やはり作業は伐採で、状況は五一六大隊と同じで、酷寒と飢餓、重労働の毎日で病人が続出して、私も栄養失調と高熱で倒れてしまった。

入院

あまりに多い病人の発生に、ソ連側は収容所の裏に天幕の仮設病院をつくり患者を収容し、私も入院させられた。

天幕は一張り十二人程収容していた。入り口の天幕は重病人で、ここで息を引きとってしまう人が多かった。死を脱して少しよくなると次の天幕に移され、順次、天幕を移り、やや回復すると退院である。

私も三週間程して天幕の仮設病院を出て、ハラグンの東方一二〇キロ程にあるヤブノロワヤの山

にあるゲネラルパーチ病院にハラグンの十数人の患者と一緒に転院した。

この病院は日本の軍医がおり、薬こそ少ないが食事と静養で体力が回復して、約一カ月程で退院、ヤブノロワヤ駅から東南四キロの山の中のサハリン収容所に移動させられた。

サハリン収容所

ここも伐採作業。ハラグンと同じ電気も水道もない。

出身部隊はばらばらだったが、同郷の人が四人いたので大変心強い思いをした。

伐採のノルマも二人で八リユーベとなっていた。木のある場所もないところも同じノルマを要求されておき、非常に理不尽だったので、私達はあることを実行して一矢を報いた。

作業が終わるとソ連の検収員がノルマの検査をして、積んだ丸太の切り口に刻印をつける。私達は翌日にその印をつけた切り口を鋸で引いてノル

マ完了として焚火にあたっていた。

次の日は、高さ一メートル十センチ、長さ四メートルに積み上げた長さ二メートルの丸太の検収の刻印を切り、少し離れた場所に向きを変えて運び、積み上げてノルマ完了として焚火にあたっていた。

ソ連の検収員は最後までこの事を気がつかなかった。余程日本兵士を信用していたのか、それとも私達の方法が巧妙だったのか、どちらかである。

二十二年九月に将校大隊を編成するため将校がまとまって収容所を出て行った。

この頃はお互いの呼び名を〇〇さん、〇〇くんと言うようになって階級制度もなくなっていた。収容所生活にもある程度順応してきたのか病気の心配も少くなり、体も回復してダモイを考えるようになった。だが、伐採作業の重労働には変わりはなかった。

夜になると演芸会が始まった。講談、落語、漫談、浪花節、流行歌など、玄人はだしの芸人がい

て楽しませてくれた。

私の分隊に「坂上のじいさん」と呼ばれていた在満の召集兵がいた。年の頃は四十歳前後。昼間は鋸の目立など軽作業をやっていたが、夜になると演芸で活躍していた。

帰国してテレビでコント五五号の坂上二郎の顔を見て、どこかで見た顔だと思ったら演芸で張り切っていた坂上じいさんの顔とダブった。それもその筈、坂上二郎はじいさんの息子だった。血筋は争えないものである。

モクゾン収容所

二十三年三月頃、ハラグンとヤブノロワヤのほぼ中間に在るモクゾンにサハリン収容所の全員が移動した。「すわ、ダモイか」と色めきたったのだが。

作業はここも伐採だった。ダモイの噂も仲間うちで聞かれるようになり、山で作業中も麓を走る列車の汽笛が気になり、手を休めることもあった。

ハラグン、サハリンの両収容所ではノルマに追われ、酷寒、飢餓で体力も消耗しての毎日の厳しい作業で、あまり問題にしなかった民主化運動も活発になり、アクチブが張り切って動いていた。

私はソ連の民間人の生活ぶりを見たり聞いたりすると、どうしても幸せな暮らしをしているとは思えず、この国の主義には疑問を抱いていたが、早くダモイするには民主化の運動も必要だと割り切っていた。だが、積極的に参加するのではなく傍観的だった。多くの人達も同じように考えていたのではないかと思っている。

帰国

モクゾンからダモイの貨車に乗ってナホトカに着く。「今までこのナホトカに来たうちでお前達が一番民主化が遅れている」と開口一番アジられた。

日本の土を踏むまではと心に言い聞かせて歩調を合わせ、ナホトカの街を赤旗の歌を歌って行進

した。

二十三年六月二十五日、ナホトカを出港、信濃丸に乗船して船中では何事もなく二十七日に舞鶴の平栈橋に上陸した。日本はどうなってしまったかと不安な気持ちを持っていたが、子供達がキャッチボールをしているのを見てなぜか安心したものである。

夢にまで見た故郷にやっと帰れたものの、米軍の空襲で我が家は焼失して帰る家もなかった。両親は郊外の農村に疎開して納屋を借りて暮らしていた。五日程、両親と一緒にいたが、遊んでもいられず、仕事を探しにT市に出かけたが、シベリア帰りは赤旗振りだと敬遠されてどこも門前払い。小学校の恩師、友人などつてを求めて奔走したが無駄骨だった。

当時、市が復興事業をやっていたので仕事にありつき、日雇い労務者になって町の中をトロッコを押して働いた。シベリアの作業に比べたら全く楽で、他の人よりも早く一日の仕事のノルマを終

えていたが、収入が不安定なのでいつまでも続ける仕事ではなかった。

ちやうど、自治体消防の発足で市が消防吏員を募集していたので応募し、消防署に職を得た。

二十三年九月から五十五年九月まで三十二年間勤務して定年退職、民間会社に八年間働いて仕事を下番した。

ハラグン墓参と慰霊碑建立

シベリア抑留中の第五一五、第五一六大隊の死亡者は、チタ州当局の資料によると二百四十七人となっている。だが私達の戦友会では、ハラグン地域の埋葬者は三百六十四名と把握していた。同じハラグン地区の五一九、五二〇大隊は二百人以上であると言われている。

私達の元満州第二〇九部隊戦友会では平成四（一九九二）年七月、ハラグンの第五一五、五一六、五一九大隊収容所跡を訪ねて、亡き戦友達の慰霊墓参をしてきた。私も参加し、朽ち果てて倒

れている無数の墓標を見て感慨無量の思いにかられた。

平成七年九月には、五一六大隊墓地に異国の土と化して眠っている亡き戦友達の冥福を祈って慰霊碑を建立した。

因みに、慰霊碑は横七百五十ミリ、縦六百五十ミリ、厚さ三ミリのステンレス板に左の銘文を彫刻し岩石に取付けたものである。

鎮魂

ここハラグン第五一五、五一六、五一九、五二〇労働大隊において私達は五百数十人の戦友を亡くしました。私達は不戦の誓いと共に世界の恒久平和に寄与致して参ります。

戦友よ、安らかに眠り給え

一九九五年九月

二〇九スミレ会抑留生存者・遺族有志一同

と日本語で記載し、その下にロシア語で同じ銘文が記してある。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年七月十二日

昭和十八年三月 愛知県立豊橋第二中学校卒業

四月 満州電信電話株式会社東京支社に入社

昭和十九年三月 同社チチハル管理局技術課

十月 関東軍第一兵技教育隊（満州第二六三部隊）に現地入隊

昭和二十年一月 歩兵第一七八連隊（満州第二〇九部隊）に転属

八月九日 白阿線五叉溝の陣地で応戦

八月二十九日 興安南省扎来特旗音徳爾にて武装解除

十月三日 満州里通過、入ソ

昭和二十年十一月〜二十三年六月

ハラグン、サハリン、モクゾン
収容所にて主に伐採作業

昭和二十三年六月二十五日

信濃丸にてナオトカ港を出港

昭和二十三年九月 豊橋市消防署入署

昭和五十五年九月 同消防署退職

昭和五十五年十月 豊橋市ステーションビル株式

会社入社

昭和六十三年三月 同社退職

現在、(財)全抑協の理事としてご活躍しております。

賞

昭和五十九年十一月三日

勲六等单光旭日章受章

(愛知県 齋藤 高志)

私の太平洋戦争とソ連強制抑留生活

三重県 川邊 幸治

はじめに

彼岸の中日、家族と共に仏壇に向かって礼拝した。祀られているのは、私が抑留中に亡くなった両親・我が子、そして、中国で戦死した弟の霊である。仏壇の前で「もし、私が抑留されずに復員することができていたなら、両親・我が子を死なせなくて済んだらうし、再会を喜び合うことができたであろうに…」などと話し合った。父母を亡くし、弟妹四人の養育に苦労した妻の話なども出て、娘も孫も真顔で話を聞いていた。

抑留されてから既に五十九年が経ち、戦友会もいつの間にか開かれなくなり、文通していた戦友も次第に死亡したり、体調をくずしたりして連絡が取れなくなつた。加齢と共に記憶も薄れがちであるが、今まで何度も各地で要請されて抑留の話